

## 美といじめについて

この「美」という字はもちろん美しいという意味ですが、昔は目下の者や弱い者に愛情を注ぐ「いづくしむ」気持ちを表していました。語源は大きい羊が戦う姿にあります。ご存じの通り、美は「羊」と「大」に分けられます。大きい羊は狼などの外敵が襲ってきたら弱い羊を守るために自分の身を犠牲にしてまでも戦いました。その戦う姿はいづくしみにあふれていることから「美」という字が生まれのだそうです。

私はこのことを論語にある教え「子曰く、君子は人の美を成し、人の悪を成さず。小人は是に反す」から引き、「美」とは美点や長所をさすことばだとして道場の子供達にいろいろな場面で教えています。学校ではいじめが横行して自殺にまで追いやることもあります。大勢が一人をいじめる背景は、いじめの対象に自分がされるのがいやだから、必死で自分以外の誰かを身代りにしようとするからだと思っています。そういうことは卑怯者のやることだから絶対してはいけないよと教えています。子ども達にそのことを、隔年開催している道場合宿の「書写」を通じて教えました。その書写に、この「美」を題材にしたのです。別紙に添付しましたのでお手透きのときにぜひお読みください。若者や子供に対峙する者として、いじめは卑怯者がやることだということを発信していい世の中にしていきたいと考えています。

## 長文を書き写す「書写」

正座をして姿勢を正し、心を鎮めて鉛筆でいねいに文字をなぞって書いてください。書き終えて間違いがないか見直し、声に出して読んでみてください。

チェーンメール、不幸の手紙というものを題材にしてこの書写をつくりました。それは、子供たちが書き写しているうちに「いじめはやってはいけない、ひきような振る舞いをしてはいけないのだ」とわかってもらいたいからです。

しかし、ただ一生懸命書き写すことだけに集中してどんなことが書かれていたかわからないうで終わるかもしれません。

しかし、それでもよいと思います。

この文字がもしかしたら脳裏に焼き付いて思い出すかもしれません。何年か経ってこの紙を見つけて読み返すかもわかりません。

いつか必ず、ひきようなことはよくないことだ、弱者へのやさしさや、損をしても正しいことをする正義感が大事なんだと、わかってくれることと信じています。

チェーンメールというのががある。私が若い頃は「不幸の手紙」といって実際に手紙を書くものだった。同じ内容を複数人に送らないと不幸になるという、受け取った者に不安感をおおるもので、手口は今も昔も変わらない。送る側は遊び半分だが、受け取った者は、転送することはいけないことだとわかっていながら、自分が不幸になるのがいやなので誰かに転送してしまうのだ。

私は、今のいじめの本質もこれと同じではないかと思っている。つまり、いじめの対象に自分がされるのがいやだから、必死で自分以外の誰かを身代りにしようとするのだ。身代りになった子がかわいそうな気もするのだが、だけどそんなことを気にしていたら自分がいじめられてしまう。他人のことよりも、自分がいじめの対象にされないことの方が大事であるという身勝手な考えがそこにあるのだ。

チェーンメールの連鎖を断ち切る手段はたやすい。それは、受け取った者が転送しなければいいのだ。不幸になるなんてバカらしい、恐るるに足らずだ、来るなら来てみると思えばいい。いじめの対処も同じだ。自分がいじめの対象というバトンを渡されても、絶対に誰かにバトンを渡さない。ぼくを

いじめようとしているのか？おそろるるにたらずだ、来るなら来てみる！そう腹をくくればいいのだ。しかし、いじめの場合にはそんなにたやすくはない。いじめっ子というのは、自分より弱そうな子に狙いをつけるからだ。自分より強く、また口達者な子には決して手出しはしない。姑息なのである。ひきょうなのである。

チェーンメールの連鎖を断ち切ろうとする者は、自分のほかに不幸な人を作ってはならないと思える優しい心の持ち主だ。いじめのバトンを渡されても、心優しい子はほかの人にバトンを渡さない。自分で背負う。すると、いじめっ子というのはとても目ざといもので、手や口を出さないことをいいことに、さらに輪をかけていじめ始めるのだ。いじめっ子ばかりでなく周りの子どもどうしようもない。自分に不幸のバトンが渡されずにすむとわかると、ここぞとばかり大いにいじめに加担する。みんな自分が大事なのだ。人のことなどどうでもいいのだ。

どうしてそんな人間が増えてしまったのだろう。その原因のひとつが、歪曲された自己主張にあると思う。自己主張をしないとダメと教わった子どもはズバズバ言うほうが有能

だと思い込んでしまった。それが高じて、人の欠点を指摘することに優越感を抱くようになり、ミスを言及し、徹底的に責めるようになる。相手は自信を失う。その自信を取り戻すためにどうするか。自分より劣っている人を探して欠点を責めるようになる。堂々巡りだ。こうして、自分を守るために弱者を見つけて責めるといふ、どうしようもない人間が増えていくのである。実は、他人を中傷するのは自分に自信がないからなのだ。

そこで、知ってほしいのが論語にある教えだ。それは、子曰く、君子は人の美を成し、人の悪を成さず。小人は是に反す。

というものである。これをわかりやすくいうと、

「孔子はこう言った。立派な人は、人の長所をほめ、短所をけなさないものだ。心がせまい人はそれとは逆のことをする。」

という意味だ。「美」とは美点や長所をさすことばだ。人はとかく悪いところが目についてしまうものだ。しかし当人は注意を促しているだけのつもりかもしれないが、実は相手の欠点が許せなくなって攻撃しているのだ。だから物事を肯定

的に見ようと心掛けて、人のいい所を見つけて伸ばしてあげよう。反対に、わるい所は目立たないようにしてあげよう。

この「美」という字はもちろん美しいという意味だが、昔は目下の者や弱い者に愛情を注ぐ「いつくしむ」気持ちを表していた。語源は大きい羊が戦う姿にある。美は「羊」と「大」に分けられる。大きい羊はオオカミなどの外敵が襲ってきたら、弱い羊を守るために自分の身をぎせいにしても戦う。その戦う姿はいつくしみにあふれていることから「美」という字が生まれた。

今の若者に、はたしてどれだけ自分の身をぎせいにしても弱者を助けようとする勇氣があるだろうか。自分より弱い者が苦しんでいる姿を見て、かわいそうだと思う憐みの心が、今、何より必要なのだ。損をしても正しいことをする正義感が求められているのだ。以前の日本は、お金持ちよりも道徳心のある人が人間として敬意を表された時代だった。そういう時代に戻そう。

俺は誓う。おまえたちに何もしてやれることはないかもしれないが、しかし、たとえ虎やオオカミがお前たちに襲い掛かってきても必ず守ってやる！